

NIVR

**精神薄弱者の職業経歴に関する研究
— 通勤寮利用者の事例が示すこと —**

1994年12月

**日本障害者雇用促進協会
障害者職業総合センター**

NATIONAL INSTITUTE OF VOCATIONAL REHABILITATION

ま え が き

障害者職業総合センターは、「障害者の雇用の促進等に関する法律」に基づき、職業リハビリテーションに関する研究・開発、情報の提供、専門職員の養成・研修などに関する総合的な施設として、日本障害者雇用促進協会によって運営されております。

このため、当センターでは、職業リハビリテーションの各領域にわたる研究・調査を広く実施するとともに、その成果を研究調査報告書その他の形で取りまとめ、関係者に提供しております。

本報告書は、このような当センターの研究活動の成果の一環として、「精神薄弱者の職業経歴に関する研究」の結果を取りまとめたものです。精神薄弱者通勤寮の利用者の職業経歴と彼らの職場以外における生活歴の検討を通して、職業適応上の“障壁”を明らかにし、その“障壁”がどのような援助によって克服できたのか、または、克服する見通しが持てるのか、に関して検討を試みたものです。そのために、就労経験の長い対象者の事例について、彼らの発達段階によって、どのような「職業適応のパターン」が見いだされるのか、を検討する枠組みを提案しました。それは、経歴を発達的に評価する枠組みであり、時間経過にともなう評価として、「就労に関する評価」「生活自立に関する評価」を行い、必要に応じて「仕事の満足度に関する評価」を検討したものとなっています。

本調査研究の企画並びに報告書の取りまとめは、望月葉子（特性研究部門研究員）が担当し、また、本書に収録されている面接調査は、松為信雄（特性研究部門主任研究員）と望月が共同で実施しました。

当該研究結果が、わが国における障害者の職業リハビリテーション対策を前進させるための一助になれば幸いです。

1994年12月

日本障害者雇用促進協会
障害者職業総合センター

執筆担当：（執筆順）

松為 信雄 障害者職業総合センター主任研究員 ： 序

望月 葉子 障害者職業総合センター研究員 ： 要旨，第1章，第3章，
第4章，第5章，
第6章第2・3節，おわりに

中里 誠 社会福祉法人白根会白根青年寮寮長 ： 第2章

大根田充男 宇都宮大学教授 ： 第6章第1節

この研究成果は，上記2氏の研究協力を得てとりまとめたものであり，それぞれの担当領域については，両氏に執筆を依頼した。

< 謝 辞 >

面接調査では，障害のある方々20名のご協力をいただきました。また，面接調査の実施に際し，精神薄弱者通勤寮白根青年寮寮長をはじめ，指導員の方々にも多大なご協力をいただきました。皆様に厚く御礼申し上げます。

1. 職業経歴研究の課題

従来、「職業経歴」の分析は職業移動に焦点をあてて行われてきた。ところが、精神薄弱者の場合、成長期に発現した知的発達遅滞という障害特性からみて、同年齢の健常者が担うことのできる職業上の役割を同じように担うことが難しい。職業経歴についていえば、(垂直的であれ、水平的であれ、その両方であれ)、結果として職業移動それ自体が健常者とは異なる枠組みで行われる可能性は大きい。例えば、職業移動に関連する課題としては、労働対価により生計をたてるには、企業内で生産性を上げることができるのか、生産性に見合った賃金・処遇で生活できるのか、キャリアの形成ができるのか、といったことがあげられる。ここには、身体障害とも異なる固有の障害特性に関連する制約があり、こうした対象者の職業経歴を分析するために、新たな分析の枠組みを必要としている。

本研究は、職業経歴の検討を通して、職業適応の評価の枠組みを検討することを目的としている。

2. 方法

精神薄弱者20名を対象として面接調査を行った。また、本人面接に先立ち、長年、指導援助に携わっている指導員に質問紙と面接による事前調査を行った。事前調査の概要は以下の通りである。

- 1) 経歴：就学に関する経歴、就労に関する経歴、家族歴、健康歴
- 2) 勤め先の概要：名称、業種、従業員数、雇用障害者数、仕事の内容、勤務条件、勤務状況
- 3) 離転職の状況：入職経路、離転職の経緯、
- 4) 仕事の遂行状況：レディネスチェックリスト抜粋、仕事に対する満足状況
- 5) 生活時間：平日と休日の過ごし方、
- 6) 経済活動：金銭管理、金銭感覚、経済活動の状況
- 7) 人生段階の節目の年齢：働き盛り、大人の時期、高齢期、引退、精神的自立、経済的自立、等
- 8) その他：生きがいや希望

4)～8)は援助者の観察評価に基づいている。なお、1)～3)は、通勤寮利用以前の状況について、本人からの情報をフォローアップすることに困難がある場合、年配者であるほど若い時期の経歴情報の精緻さに限界がある。

さらに、経歴に評価の視点を加えて分析・検討を行った。したがって、事例は本人・援助者・研究者の3者の視点により構成されている。

3. 評価の枠組み

精神薄弱者の職業経歴をみると、生涯を通してさまざまな仕事を転々とする人もある。しかし、多くの場合、指導・援助を得て次第に落ちつき、「腰を据えて取り組む仕事」に定着するパターンを示すように思われる。そこで、職業生活を、①：準備期、②：試行期、③：安定期、④：下降期、にわけてパターンを分類し、各時期を次のように区分した。

- ① 準備期：家業の手伝いや施設での実習・園外実習など、仕事に適應する準備の段階
- ② 試行期：比較的短い期間（概ね3年未満）でいくつかの仕事を転々とする段階
- ③ 安定期：概ね3年以上の長期にわたって仕事に定着する段階
- ④ 下降期：引退へのソフトランディングの段階

4. 結果と考察

（1）職業経歴について

職業経歴の典型は、①→②→③→④の順序で職業生活が展開することになる。しかし、検討した年配者の10事例では4つのタイプに大別できた。

タイプa＜典型＞：準備 → 試行 → 安定 → 下降

タイプb＜安定継続型＞：安定

タイプc＜試行安定型＞：試行 → 安定

タイプd＜中断型＞：準備 → 試行 → 準備 → 安定

試行 → 準備 → 安定 → 下降

準備 → 試行 → 準備 → 安定 → 下降

試行 → 準備 → 安定

事例を総括すると、安定継続型と試行安定型は典型の一部を省略し、一部をこれから経験する予定の段階であるとみることができる。つまり、安定継続型は準備期と試行期を省略して安定期に入っているが、下降期はまだ経験していないパターンであり、試行安定型は、試行期を省略して安定期に入っているが、下降期はまだ経験していないパターンであるとみることができる。これに対し、中断型は典型に一本化されるこうしたパターンが何らかの要因で中断され、一旦は低い段階に下降するが、対応した援助を得てレベルを回復したパターンであるとみることができる。こうした要因として、精神疾患の発病や問題行動の発現、加齢にともなう身体障害の重篤化があげられる。

10例のパターン分析から明らかになったことは次のとおりである。

- （1）生活自立のレベルの達成状況が就労レベルの達成状況と関連する。
- （2）生活自立を支援する体制が整っていれば、早期に高い就労レベルを達成できる。

(3) 生活自立と就労レベルの達成、並びに維持には、日常的な援助体制が必要である。

また、生活自立と就労レベルに基づく職歴評価の枠組みが有効であり、若年者にもあてはまることが示唆された。

(2) 加齢にともなう変化について

探索期を経て安定期に入り、下降期から引退に至るという職業生活の基本的なパターンにそってみると、下降期は身体的な衰えと対応している。しかし、下降期の変化が急激なことからみると、過労が高じていたことも考えられる。早い時期から引退へのソフトランディングの方策が必要であることを示唆している。

しかし、就業の意欲に関連した項目の他に、理解と学習能力に関連する項目などの項目では身体的な衰えに対応した能力低下は見いだされないことから、身体的な衰えを受容することが困難になるという問題が生じる。これが下降期の課題であると考えられる。

(3) 仕事に対する満足度の評価について

満足が高いと生産性が高いという見方は、精神薄弱者の場合には確かにあてはまるとはいいがたい。「昇進の可能性」が少ないこと、「給料」が少ないこと、は特に勤続年数が長くなって一般労働者との格差が開いたときに深刻さを増す。このこと自体は処遇の問題であり早急に改善することは困難である。「会社の将来性」や「会社の経営方針」に満足することで代償させているのかもしれない。

就労の継続は、対人的要件（「上司」や「他者承認」）、自我関与的要件（「仕事に対する興味」や「能力を試す」）などに対する満足との関連が深い。

本報告書では、仕事の世界からの引退を目前にした年配者の生涯を振り返ったとき、全く経験できなかった出来事と、時期は遅れても経験した出来事とが明らかにされた。職位の上向移動という意味ではキャリアの形成は見いだされなかった。しかし、職業人として一人前になるという課題は達成されており、職業人らしく振る舞うことが精神的に自立することなど、生活自立の課題達成と表裏一体であることが示された。ゆっくりではあるが援助を得て職業生活を維持継続する中で生活自立を達成していく過程が明らかにされたといえる。こうした生活設計の展開に果たした援助システムとして、通勤寮の役割は大きいもの考える。

目 次

序	キャリア発達研究のねらい	1
第1章	精神薄弱者の職業経歴研究の課題	
第1節	職業経歴研究の目的	5
第2節	職業経歴を検討する視点	7
第2章	精神薄弱者通勤寮の概要	
第1節	通勤寮の概要	16
第2節	利用者の実態	18
第3節	指導・援助の概要	22
第3章	職業経歴の概要	
第1節	職業適応のパターン	28
第2節	職業経歴の概要 — 年配者の事例から —	
1.	典型：転職を繰り返した後、援助を得て定着したK氏の事例	31
2.	安定継続型	
2-1	一つの職場に20年：Mさんの事例	37
2-2	一つの職場に22年：Nさんの事例	41
2-3	個人商店に住み込み、家族同様に過ごした経験の長いPさんの事例	45
3.	試行安定型	
3-1	黙々と仕事に取り組むL氏の事例	50
3-2	結婚問題に当面するQ氏の事例	55
4.	中断型	
4-1	脳性まひのあるS氏の事例	60
4-2	青年期まで知り合いの“おばあちゃん”と同居したOさんの事例	65
4-3	問題行動で「就労—解雇」を繰り返したR氏の事例	70
4-4	精神疾患のあるTさんの事例	74
第3節	年配者の職業経歴が示唆すること — 職業経歴による評価の重要性について —	78

第4章 精神薄弱者の職業生活設計支援の課題

第1節 職業生活設計と生活自立の課題	80
--------------------	----

第2節 職業生活設計支援の概要 ― 若年者の事例から ―

1. 学校卒業後、職業訓練を受けて入職した事例から

1-1 職業訓練校を卒業したA氏の事例	81
---------------------	----

1-2 職業訓練機関を卒業したBさんの事例	85
-----------------------	----

2. 就労の継続に問題を持つ事例から

2-1 異性への関心の強いCさんの事例	90
---------------------	----

2-2 対人スキルが高いと誤解されるD氏の事例	94
-------------------------	----

2-3 重複障害で疲労の著しいE氏の事例	99
----------------------	----

3. 解雇寸前の事例から

3-1 注意されると泣いてしまうFさんの事例	104
------------------------	-----

3-2 職場で猫と遊ぶG氏の事例	108
------------------	-----

4. 家庭での疎外の影響が大きい事例

4-1 母親ときょうだい8人が知的ボーダーのHさんの事例	113
------------------------------	-----

4-2 暴力的な環境で言葉を失ったI氏の事例	117
------------------------	-----

5. 就労による成長著しいJさんの事例	122
---------------------	-----

第3節 若年者の職業経歴が示唆すること ― 生活自立に関する評価の重要性について ―	126
--	-----

第5章 職業リハビリテーションの課題 ― 事例の検討を通して ―

第1節 加齢にともなう変化について	128
-------------------	-----

第2節 仕事に対する満足度について	133
-------------------	-----

第3節 生活自立について ―「経済活動」と「時間展望と時間管理」の視点から ―	136
---	-----

第6章 障害のない勤労者の職業生活設計との比較

第1節 勤労者の職業生活設計の概要

―「勤労者の職業生活設計に関する調査」の結果から―	144
---------------------------	-----

第2節 障害者の職業経歴の特徴	153
-----------------	-----

第3節 精神薄弱者の職業発達における通勤寮の役割	161
--------------------------	-----

おわりに	162
------	-----

資料 事前調査票と調査票作成要項	167
------------------	-----

「勤労者の職業生活設計に関する調査」調査票